

二〇一八年七月一三日

天神へ片陰つづる女坂
鳶の輪の山巔高く梅雨明くる
覗き見る井戸に三つ四つまくわ瓜

なつき
有香
はく子

二〇一八年七月一二日

足元の靴裏返り三尺寝
定食のおまけが嬉し冷奴

たか子
うつぎ

大観の霊峰十趣館涼し

小袖

二〇一八年七月一日

太柱しかと爪たて蟬の殻
子らの声空に飴すプールかな
ストレッチしながら庭の草を引く

ぼんこ
宏虎
こすもす

二〇一八年七月一〇日

梅雨明けの風吹き抜ける三和土かな
短夜や豪雨のニュースつきつきと
ジャンプして脚長きこと雨蛙
突と浮き白玉団子茹で上がる

三刀
満天
たか子
たか子

二〇一八年七月九日

豪雨明け初蟬を聞く朝の卓
切通し過ぎて展けし青田かな
飴玉が終点となる蟻の道

せいじ
愛正
たか子

二〇一八年七月八日

木彫の盆に輪染みや冷麦茶
夏木立一本道の先は湖

よう子
智恵子

二〇一八年七月七日

河骨の同じ角度に傾ぎけり
交叉する旧街道や夏燕

たか子
うつぎ

毎日句会みのる選・二〇一八年七月一五日